歴史のまち、羽曳野 8　古代から現在に続く道

交通の要衝

海に面する古代の難波は、外国や西日本各地と行き来するための、港や公的な施設がある重要な場所でした。その頃、難波とみやこがある飛鳥とをつなぐ大道が通る羽曳野は、交通上の拠点として大きな役割を果たしていました。ここが道程のほぼ中間点にあたり、また、大道の道すじでは最大の川である石川の川越えの地点であること、山越えの道の入り口にもあたることが、人々や物資の通行を管理したり、中継する上でふさわしかったのでしょう。たくさんの人々や物資が道を行き交い、道を通して運ばれる情報や文化が集まる賑わいの土地だったのです。それから以降も、交通の要衝としての役割は後々の世に受け継がれ、江戸時代の羽曳野も街道すじのむら、街道が交わるところのまちとしての歴史を辿りました。

東西の道、竹内街道

現在の羽曳野市域を、あたかも中心軸のように東西に横断する竹内街道は、古代の大道、丹比道を受け継いだ、泉州堺と大和（奈良県）をつなぐ江戸時代の主要街道の一つです。この頃の堺は、繁栄のピークであった戦国時代末期ほどではないとはいえ、海運や産業が盛んな大きな町で、「天下の台所」大坂（明治以降は大阪）とも紀州街道で結ばれています。一方、大和は豊かな農作物、さまざまな特産品の産地であるだけでなく、数多くの寺社や旧跡があり、伊勢へ向かう道も通っています。竹内街道が担った、交通上の役割の大きさが想像されます。羽曳野のさまざまな産物もこの道によって運ばれ、羽曳野から寺社参りや名所見物に旅立つ人たちもこの道を利用したことでしょう。もちろん、羽曳野に住む人たちにとっては、毎日歩く村の中の道であり、近隣の村々をつなぐ、身近な生活道路でもあったはずです。

道が語る羽曳野の歴史

現在の羽曳野市域を南北に通る東高野街道は、京都から河内を通って霊場、高野山に至る道で、生駒山の山すそを通るあたりでは「山の根道」とも呼ばれていました。河内平野の縁をまっすぐに走ることから、もとは京都から河内の国府（藤井寺市惣社付近）に行くための官道が、そのはじまりとも言われています。高野山が開かれた平安時代以降になって弘法大師への信仰が深まるとともに、京都に住む皇族や貴族が、しばしば高野山を参詣に訪れるようになり、しだいに庶民の間にも高野参りが広まりました。東高野街道はこれに伴って参詣道としてのかたちが整っていったと考えられます。東高野街道が竹内街道と交差する古市の蓑の辻は、河内を南北、東西に貫く二つの幹線道路の結節点として、人馬や荷車の往来で大いに賑わったことでしょう。

竹内街道と東高野街道、さらには長尾街道や順礼街道、大坂街道など、江戸時代の羽曳野はいくつもの道が通じ、交差するところでした。南阪奈道路や外環状線など、道で賑わう現在の羽曳野のすがたには、長い道の歴史が反映されているように思えてなりません。

（世界遺産登録準備室）

サラダボール

社会に出て仕事をするときは、会社の組織人として、また私生活においては、年齢を積み重ねるごとに、常識ある行動を心がけています。

そんな中、昨年、足にケガを負ってしまい、治った今もケガをした足をかばって歩く癖がついてしまいました。ある日、会社からの帰宅途中、駅のたくさんある改札ゲートのひとつを通ろうとしていたとき、後ろを歩いてた人に追い抜かれ、「どけ！何ゆっくり歩いとんねん！」と、見知らぬ男性に怒鳴られました。その人は、そのまま振り向きもせず早足に進み、やがて私の視界から消え去りました。

多分、その人は何か急ぐ用があったために、何よりも自分自身を優先させたかったのでしょう。また、私も特にゆっくり歩いているつもりはありませんでしたが、その人から見て相対的にゆっくり歩いていると判断されたのかもしれません。

その時は、あまり深くは考えませんでしたが、翌日、冷静に思い返してみると、なぜ、あの人は、あんな言い方をしたのだろう。なぜ、たくさんの改札ゲートがあるのに、私が通ろうとしているゲートを選んだのだろうと。人は、自分と相手の立場を比べ、相手が自分より弱者だと感じたときには、横柄な態度をとってしまいがちです。あの人もそうだったのかもしれません。

しかし、私は、今までいろいろな経験をする中で、たとえ立場が違ったとしても、私たちは同じ人間同士であり、相手が弱者であると感じたときには、なおさら寄り添う気持ちで接するべきだと思うのです。互いが心地よく過ごすことができるよう心がけなくてはなりません。

「私がいるからあなたがいる」ではなく、「あなたのおかげで私がいる」というような気持ちで、常に思いやりをもって接していきたいものです。

（人権推進課）